

日経MJ 2019年6月17日付

24時間営業店のあり方

東京で生活している人に「明日渋谷でお会いしましょう」と言ったら、渋谷のどこにどの時間に来ると考えるだろうか。ほとんどの人が正午に八チ公前だろう。そこを特に指定しなくても、多くの人が渋谷の代表的な待合場所は八チ公前であり、時間は昼ごろだろうと考える。こうした現象を「フォーカル・ポイント」と呼ぶ。焦点とでも訳すのだろうか。世の中には誰かが決めたわけではないが、なんとなく多くの人が持っている共通認識や行動パターンがあり、それは社会が機能する上では重要なので



伊藤元重の

エコノウオッチ

ある。すべてを制度や政策で決められるわけではないのだ。こうした現象の背景には、人間の群れ(herd)的行動がある。人間は孤立した存在ではなく、常に周りの人の行動を見ている。そして、それに合わせて行動する傾向がある。最近話題になることの多い行動経済学でも、この群れの行動が話題になることが多い。問題は、この群れの行動原理の結果が常に社会全体にとって好ましいわけではないということだ。群れの行動が問題を起す代表的な現象が、バブル

社会全体から検証必要

の生成やその崩壊である。株式や不動産の投資では、他の人が積極的に購入しているときには、自分もそうした行動をとった方がよいと考えることが多い。十分な知識や能力がないと思えば、周りの人や専門家の話を聞いて判断することは一般的には悪いことではない。ただ、そうした群れの行動の結果として、過熱やバブルの崩壊につながることもある。

群れの行動原理の結果として、社会のシステムが向かう方向に問題があると考えられるときは、その是正を社会全体で議論しなくてはいけない。最近話題のコンビニエンスストアや外食などの24時間営業について

でも、こうした視点から見る意義は大きい。店を24時間開けるかどうかの判断は、もちろん企業や店のオーナーが主体である。ただ、そうした個別の判断の結果として過剰なまでの24時間営業が広がった時、その是非について議論するのは、個別企業の判断を超えているだろう。ドイツなどに行くと、平日の夕方以降や週末は店が開いていないことが多い。日本人から見れば、随分不便だと思う。しかし、動き手がゆっくりと休むには、その方がよいと考えるドイツ人も多いのだろう。だからこうした制度が維持されている。日本に来て24時間煌々(こうこう)と灯がついている店を見て、異様に感じるドイツ人も少なくないはずだ。日本では多くの店が24時間開いていることが当たり前のようになってきている。他の店が開いているときに、自分のところだけ閉めるわけにはいかない。こうして形成されてきた慣行を変えるのは簡単ではない。店だけでなく、消費者の理解も得なくてはならない。ただ、人手不足が深刻化し、働き方改革が重要課題になる中で、そろそろ現在のシステムが行き過ぎていないのか、社会全体の視点から検証が必要な時期にきている。

(学習院大学国際社会科学部教授)